奈良県 いのちの教育

令和3年度「いのちの教育実践研究事業」

奈良県が目指す「 いのちの教育」

●動物への思いやりを深め、「いのち」 の大切さを実感させる。

●他者との関わりを深めながら、 情操を豊かにする。

●野生動物を含む自然環境の保護についての理解を高める。

「いのちの教育プログラム」 とは？

うだ・アニマルパークで実施している「いのちの教育プログラム」では、私たちと動物との関わりに気付き、動物にも感情や要求（ニーズ）があるということ、動物の「いのち」が私たち人間と同じであることを感じ、それぞれの動物の「いのち」がよりよく生きるために私たちがどのような責任を負い、果たすべきなのかを考えます。

「いのちの教育実践研究事業」とは？

奈良県教育委員会は、うだ・アニマルパークにおける動物とのふれあい等を生かした「いのち」に関する学習を核に、教育活動全体で生命を尊重する心を育てる実践的な研究を行う「いのちの教育実践研究校」を指定し、その取組を県内に広く知らせています。

令和3年度は奈良市立朱雀小学校と宇陀市立菟田野小学校を指定し、取組を実施していただきました。

うだ・アニマルパークについて

宇陀市大宇陀の県畜産技術センターでは、60年以上にわたり、牛・豚・鶏などの試験研究を行い、様々な成果を上げています。平成13年4月に大家畜（牛）部門が宇陀郡御杖村の「みつえ高原牧場」に移転したことによる敷地の有効活用として、動物とのふれあいを通して次代を担う子どもたちの健全な育成を目指すとともに、県内外のみなさんにレクリエーションの場を提供し、社会全体の発展に寄与することを目指し、うだ・アニマルパークを設置することにしました。

うだ・アニマルパークは、人と動物とのふれあいを通して、動物を学び、動物から学び、そして動物のために学ぶ「いのちの教育」を行い、広く県民に、動物全般に対する理解を促進するとともに、動物に対する愛護の思想について普及啓発を図り、豊かな社会づくりに寄与することを目的とした施設です。

奈良市立朱雀小学校

『LIFE～植物、動物、自分の命』

【研究課題】

本校は、校内の緑に加え観察池もあり、子どもたちが自然に触れる機会が多い。本校の子どもたちは生き物を好み、運動場で虫を探したり観察したりして生き物と親しんでいる。校内ではうさぎを３匹飼っており、中庭に面して小屋を設置しているので、いつでも子どもたちが目にすることができる。また、月に１回飼育栽培委員会の取組で「ふれあい広場」という、子どもたちがうさぎと触れ合う機会を設けている。

本校は「人とつながり、自ら考え、行動する子どもの育成」という学校教育目標を掲げている。自ら課題を発見し、探究することを通して、思いやりをもち互いに支え合い、自分と地域に誇りをもつ子どもの育成を目指している。第２学年では生活科及び「いのちの教育プログラム」を通して、「いのち」の重みや尊さを実感させ、思いやりの心情を育む取組を行っていきたい。

【取組の概要】

○１学期

生活科「大きくそだてたわたしの野さい」では、野菜が育つ場所や変化の様子に関心をもたせる。世話の仕方を調べたり、人に聞いたりしながら世話をすることで、植物にも生命があることに気付き、親しみをもって大切にできるように指導した。

また、「みんな生きている」の学習では、生き物を飼ったり育てたりしながら、関心と親しみをもたせた。生き物にも命があることに気付き、大切に関わる態度を養った。

○２学期

「いのちの教育」プログラムを通して、動物の命の大切さや、共に生きていることの素晴らしさを学び、自身の命と生き物の命を大切にしようとする姿勢を育てた。

○３学期

生活科「これまでのわたし、これからのわたし」の学習を通して、自分自身の成長を振り返る。多くの人に支えられ、今の自分がいることに気付き、これからの自分の生き方を考えた。

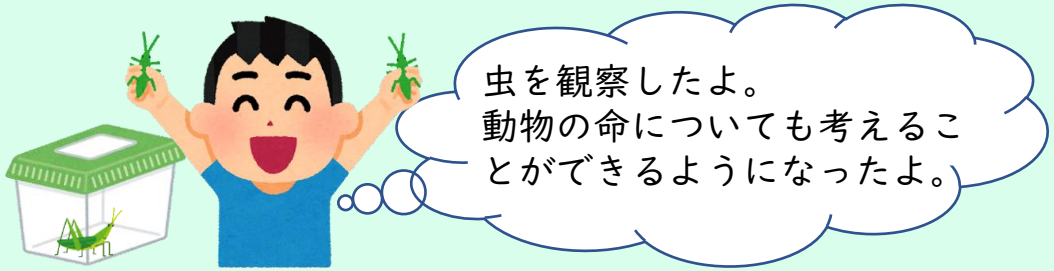
○その他

全校で「命の大切さ」というテーマを基に、各学年が取り組んだ内容を、人権集会（リモート）で、学校全体で共有した。２年生は「いのちの教育」プログラムで取り組んだ内容や学習の感想について発表を行った。

【取組のようす】（小学校２年生）

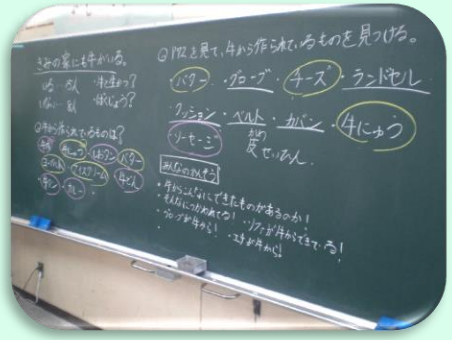
○生活科の学習を通して

１人ずつミニトマトを育てることを通して、植物の命や成長に気付けるよう学習を進めた。ミニトマトが成長する様子をＩＣＴ端末を使って観察記録をとり、茎が伸びたり、実が赤くなったりする様子から、児童は**植物が生きていることを意識できるようになった。**



○「きみの家にも牛がいる」を通して

「きみの家にも牛がいる」の絵本を題材に、人間の生活環境の中に牛の命が使われていることを考えた。牛から作られているものについて児童に聞くと、牛乳や牛肉、乳製品、かばんなどたくさん出てきた。さらに絵本を読み進めていくと、牛の皮からはベルトや靴、爪や角からはボタンや印鑑、ハンドクリームなど思いもよらなかった身近なものまで牛から作られていることが分かり、**人間は牛の命をいただいて生活していることに気付くことができた。**



〈児童の感想より〉
- 牛は人間のために頑張ってくれてるんだなぁと思いました。
- もっと命を大切にしたいと思いました。
- 牛の命をもらって生活しているから、ぜったい「いただきます」を言おうと思った。
- 最初は「家に牛なんていない」と思ってたけど、身近なところに牛がいることが分かりました。

○獣医さんのお話を聞いて

奈良県獣医師会の獣医さん３名に来ていただき、それぞれテーマごとに話をしていただいた。

①「動物のうんち」は宝物！

油性ニスでコーティングした家畜の乾燥糞便を５種類観察した。草の入った糞、大きめの糞、においのきつい糞などから想像し、どの動物の糞なのかを考えた。動物は話すことができないので、うんちを見ることで体調を判断することを知り、児童から「だから宝物なのか」とのつぶやきがあった。

②うさぎの心拍を聴いてみよう！

学校で飼育しているうさぎの心拍を聴いたよ。

めっちゃ速い!!

すごい!!

聴診器を使い、うさぎの心拍を聞き、その速さに児童が驚いていた。獣医さんから「小さい動物は大きい動物に勝てないから、すぐに逃げられるようにするために心臓がいつも速く動いている」と説明があった。その時に「だから跳べるのか」という反応があった。

③児童の質問に答えるよ！

「魚はどうやって眠るのか」「ペンギンはなぜとべないのか」「ライオンの歯はどうやって治療するのか」「動物と人間の薬に違いはあるのか」などの児童からの質問に答えていただいた。

【研究の成果】

○１学期

　生活科「大きくそだてわたしの野さい」の学習では、学級園で夏野菜を育てたり、一人ずつミニトマトを栽培したりしながら、植物の成長を通して、植物に生命があることや成長していることに気付くとともに、親しみをもって大切にすることができた。

　また、「みんな生きている」の学習では、学校内で生き物をつかまえ世話することで、生き物も自分たちとおなじように生命をもっていることに気付き、大切に関わろうとすることができるようになった。また、生き物が育つ場所や変化の様子に関心と親しみをもつことができた。

○２学期

　「いのちの教育」プログラムにおける、うだアニマルパークへの遠足や出前授業を通して、動物の命の大切さや、共に生きることの素晴らしさを学び、自身の命と生き物の命を大切にしようとすることができた。

○３学期

　生活科「これまでのわたし、これからのわたし」の学習を通して、自分自身の成長を振り返ることができた。活動の中で、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったことや役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつことができた。

○その他

　全校体制で「命の大切さ」について人権集会（リモート）を行った。各学年の取組を共有しながら、「命の大切さ」について考えることができた。

宇陀市立菟田野小学校

『つながる「いのち」と「わたしたち」
～動植物を通した“衣”の視点より～』

【研究課題】

本校は、山を切り開いた丘の上にあり、豊かな自然環境に囲まれ、児童にとって自然や動植物は身近な存在ではあるが、興味本位で生き物を持ち帰ったり、触ったりするだけで、動物や植物を愛護する気持ちは十分に育ってはいないように思われる。本プログラムを通して命の大切さを学び、動植物と自分たちの生活との関わりを考えられる子どもの育成を目指したい。

また、動物との関わりのほか、人のいのちの始まりや誕生についても考える機会をもつことが、実施学年である１年生にはより効果的であると考える。

【取組の概要】

○動物

９月	アニマルパーク職員来校	ペット・家畜・野生動物のつながり①
９月	毛皮革工場見学	毛皮について、キーホルダーづくり
10月	アニマルパーク訪問	動物とのふれあい
11月	アニマルパーク職員来校	ペット・家畜・野生動物のつながり②
11月	人間のいのちのお話	ゲストティーチャー（助産師）の話を聞く

○植物

５月～10月	綿花の栽培	綿花の種まき、収穫
11月	綿の糸紡ぎ体験	ゲストティーチャー（綿栽培）の話を聞く
12月	作品製作	綿のハンカチ染め、綿入りリースづくり

両方の取組をまとめて、12月に開催された「第28回菟田野人権フェスティバル」で展示発表をした。

【取組のようす】（小学校１年生）

〇植物とわたしたちのつながり
　綿を栽培して、育てた綿でアサガオのリースを作ろう！

３学期に国語で「たぬきの糸車」を学習したよ。

５月　綿の種をまいた。

水やりをしたり、観察して記録したりしたよ。

10月　綿の収穫をした。

綿が収穫できたら･･･
地元の綿の栽培をしている方に来ていただき、「綿から糸を作り、生地ができるまで」の工程について写真を見せてもらいながら説明していただいた。

糸をつむいで一本の糸にして衣服が作られていることを知り･･･
“私たちは植物の命をいただいている” ということを感じることができた。

○動物とわたしたちのつながり
地場産業の毛皮工場を見学し、毛皮のキーホルダーを作ろう！
９月　地元の毛皮工場へ見学に行った。

「これが命をいただいていることやなぁ。」

好きな色の毛皮を選び、フックをつけてキーホルダーを作ったよ。

キーホルダー

　児童は、「寒いところに住んでいる動物だから、その毛皮を着ると暖かく感じるんだよ」など、毛皮について分かりやすく説明してもらい、毛皮を作っているところを見せてもらったり、実際に触らせてもらったり、毛皮のキーホルダーを作ったりすることで動物の命を身近に感じていた。

　この体験を通して･･･

“私たちは動物の命をいただいている”

ということを感じることができた。

毛皮の大きさにびっくり！

【研究の成果】

今年度は、動物と植物の両面から命について考えた。

アニマルパークに見学に行くことで動物とふれあったり、毛皮に触ったりキーホルダーを作ったりすることで、動物の命が自分たちの身近にあるのだと感じていた。また、綿の栽培や収穫をしたり、綿花から糸を紡ぎ一本の糸にして衣服が作られていくことを聞いたりすることで、植物の命が自分たちの身近にあることを感じていた。そして、ゲストティーチャーの助産師さんの話から、「お母さんにありがとうを伝えたい」「友達を大切にする」などの感想が出され、改めて命の大切さを実感していた。

また、12月に「第28回菟田野人権フェスティバル」が宇陀市人権交流センターで開催され、『つながるいのちとわたしたち』というテーマで、感想と作ったリースや染めたハンカチを展示することで、地域のみなさんに命の大切さを伝えた。

この取組を通して、“私たちは動物の命をいただいている”“私たちは植物の命をいただいている”ということを感じることができた。また、人の命を守るために動物や植物が深く関わっていることに気付くことができた。